

図の上部には、次の文がある。

文化十一年甲戌三月堺町中村座において亡父坂東是業  
法名栄功院是業観道信士三十三回忌追善狂言第一番目  
清玄の役相勤第二ばんめ新狂言十二支の所作事古今無類

大入大当り

大でき

それ  
姿にさくや  
桃  
桜

よせてみつまたもじふにし  
寄三津再十二支

右早かは  
り所作事

坂東三津五郎 秀佳

かけ合 娘ほめことば

東西 狂言なかばにじやまをもかへり

みつ大去年ことし 十二月きから十二支へ

つゞいてあたる矢と的を家名にほめて

やまと屋の 大将さんをほめやんせう

とのごぶりから仕うちまでやさしう

見えてやはらかで花も実もある

当世男 しんぞ命は千代かけて

初子のけふの姫小松ひくて数多

の主さんに ひかるゝ牛の角文

字や いとしざかりのとりなりと

皆いふぜんの振ぶりの袖そでその振ぶりもよくほつそりと

やせや小原せはらやせり売うりのういらつ売うりが口拍子くちびやうし

まはつてくるは ことしで三十三回忌くわい忌 親おやは是業ぜぎやう

子は秀佳しゅうか 親ついでんの追善しぜん 子せいげんが清玄しやげん 所作しよささんすか所作しよさをせうと

このみの長ながうた 好このみの浄じやうるり こん 今度こんどの大ひやうばん

千里せんりをはしる虎屋こらよりも此大入しほかりは紫刈むらのしは 耳みみにとどめたり

ちよん 幕まくにかち 山やまぢいぢいは花はなのやまと屋やとは むかし の

はなしにもついでおぼえぬ大あたり 世よに名なはたつのみやこも

鄙ひなもたゞ狂言きやうげんのうはさのみ 遠とほからんものは乙姫おとひめのおとにや聞きく

らん 近くちかはよりてみな人の 鼻ひな扇せんをひとりえの島しまに 籠こもる

座頭ざとうの文字もじさへも座ざがしらとよむ 勇いさしき 俠客いさみの形なりもはやかに時ときを

江戸えどつ子つこきつすいの五寸ごすんたるみに革羽織かはばおり はやり詞ことばの沢山たくさんとは所作しよさの数かず

よりはじまりけり いつも大極上くわいちやうじやう上吉じやう 位付いぢけさへ年とし に鳥居とりゐをこえた

初午わつじいなりの王子わうじ稻荷いなりは千磐破ちはやぶら かみきぬた打うつ月夜つきよよく日吉山王ひよしざんわう

まつりにはまづねりいだす猿田彦さゐまたひこうつす神代かみよの伴優わさをぬの

道みちしるべせよ 籠こも在あり 天あまの岩窟いわくのかぐらうた

おもてしろしよ面白おもしろき常世とこよの 鷄けいの 一巻ひとまきは

锚女つゆめにあらぬ むすめのすがた うつねばかはる

さま に八百や万のかみ拾ふ つゞれの衣も

錦と見る古今無類の大たてもしよさの所作と

いひ地芸といひ然ても親御に仁田の四郎

たゞ常ならぬ 名人上手前代

未聞のつわものやと 貴賤上下

おしなへて皆 勘三が芝居の

大はんじゃう 千秋万歳 万

歳 ひとつしめまじよ しゃん

いはぶうて三 はて三がの津はことも

おろかよ 六十余州の御見物を

寄せて見つ 又も十二支

あはせて大入大 あたり

追善狂言

歌舞伎

の栄と

ほく敬って

ぢやはいなあ

秀佳主の大あたりをあまねく

諸国の御鼻眞に伝へんとて

江戸戯作者式亭三馬「印」

需もせぬ小筆を採る